

研究ノート

19世紀前半期の英領インド官吏教育を担った教育者たち

—フォート・ウイリアム・カレッジのヒンドウスターニー語教員を一例に—

倉橋 愛\*

Educators who Contributed to Education of Government Officials in British  
India in the First Half of the 19th Century:  
A Case Study of Hindustani Language Teachers at Fort William College

KURAHASHI Ai\*

This paper focusses on the heads and *munshis* (native language teachers) of the Hindustani Department at Fort William College (FWC), who undertook several educational and translation activities. Further, this paper attempts to organise information on their careers and activities at the college. FWC was established in Calcutta in 1800 with the aim of educating junior officers of the British East India Company who were to be assigned to administrative posts in India. Although the college was abolished in 1854, it succeeded in producing many competent individuals. The FWC Faculty Division was divided into the European Establishment and the Native Establishment. Western teachers belonged to the European Establishment, and teachers from the East belonged to the Native Establishment. One of the characteristics of FWC was that *munshis* worked under the instruction of European teachers. The language teachers at FWC mainly taught one or more Indian languages such as Hindustani, Arabic, Persian, and Bengali. Heads of the Hindustani Department who followed John Borthwick Gilchrist produced no noteworthy achievements, but they did work to promote FWC's educational activities and the status of teachers. In addition, FWC hired *munshis* in a way that was recognised by FWC officials, and the *munshis* were invited to the college. It is noteworthy that Lallulāl was a *munshi* at FWC for an extended period and emphatically promoted FWC's publication activities. Such activities by the *munshis* prolonged the continuation of FWC.

---

\* 大阪大学大学院言語文化研究科, Graduate School of Language and Culture, Osaka University  
2019年11月14日受付, 2020年6月5日受理

## 1. はじめに

イギリスがインド統治を急速に拡大しつつあった19世紀前半期、インド統治を担う文官へのインドにおける教育は、1800年にインドのカルカッタ（Calcutta）に設立された、フォート・ウィリアム・カレッジ（Fort William College, 以下FWC）を通してなされた。イギリス東インド会社の文官養成機関である同カレッジでは、インド統治に必要な資質を文官に習得させるべく、インド現地語を中心とした教育が行なわれた。

しかし、会社取締役会の許可を待たずに設立されたことと、その莫大な維持経費から、このカレッジは、設立直後から会社取締役会による縮小命令を受け続けることとなった。さらに、取締役会の理事からの推薦によって文官が任命されていたことに批判的な世論の高まりを受け、1830年代にはFWCでの講義は停止され、定期試験のみ実施されるようになる。その後、英領インドの文官の任命は、イギリス本国での公開競争試験によって行なわれ始め、FWCは1854年に廃校となった。これらの出来事の背景には、19世紀に盛んに繰り上げられた、英領インドにおける教育をインド土着の言語で行なうべきか英語で行なうべきかという、オリエンタリスト（Orientalist）とアングリシスト（Anglicist）の論争が、アングリシストの勝利へと向かっていった経緯があった。

FWCに関する先行研究は、主に、日本語、英語、ヒンディー語、ウルドゥー語で書かれたものが存在する。それらの多くがFWCの組織や教育内容について詳細に触れているが、先行研究の数としてはかなり少ない。

本稿のテーマであるFWCのヒンドゥスターニー語教員に関する、先行研究の概要を述べると、日本語の研究としては、倉橋によるもの〔倉橋2017〕がほぼ唯一と考えられる。英語の研究としては、ダース〔Dās 1978〕が簡潔にはあるが教員一覧を挙げており、ジョーンズ〔Jones 2007〕やキドワイ〔Kidwai 1972〕は、FWCの代表的なイギリス人教員ギルクリスト（John Borthwick Gilchrist）の経歴や業績についてかなり詳しく述べている。マクレガー〔McGregor 1974〕はFWCのインド人教員ラッルーラール（Lallulāl）の生年やFWCに雇用された時期、著作について、少ない記述ではあるが言及している。

ヒンディー語の研究としては、ヴァルシュネーヤ〔Vārṣṇeya 1947〕がかなり詳細な記述を行っており、教員の任期や活動内容を中心に多く取り上げている。また、ヴラジラタンダース〔Vrajratandāsa 1953〕は、ラッルーラールの著作情報についてある程度詳しく触れている。

ウルドゥー語の研究としては、シャミーウッラー〔Samī'ullāh 1989〕のように、FWCにラッルーラールが採用された時期について述べているもの等が存在する。

南アジア研究においてヒンディー語散文の発展・普及に大きく貢献したとされ、またイギリス帝国史研究においてインド統治政策に必要な官吏教育の一翼を担ったとされてきたFWCで

あるが、その先行研究においては、ヴァルシュネーヤと近年の倉橋による研究を除き、多くの研究対象が設立後間もない時期に偏っていることが課題とされる。

そこで本稿では、設立直後からその実質的機能を失ったとされるまでの約 30 年間の FWC で行なわれた活動の変遷を、歴代のヒンドゥスターニー語に関する史料を時系列に沿って整理することで明らかにしたい。具体的には、ヒンドゥスターニー語科長を務めた人物の経歴と活動を取り上げ、彼らが FWC での待遇改善のために行なった働きかけや、著作活動等に焦点を当てる。可能な限り FWC 教員による記録といった一次史料も使用し、19 世紀前半期の英領インドで活動を行なった FWC 教員に関する資料を提示できるよう努める。

## 2. ヨーロッパ部門の教員

### 2.1 ローバックによる教員についての記述

FWC の教員部局は、ヨーロッパ部門 (European Establishment) とネイティブ部門 (Native Establishment) に分かれており、ヨーロッパ部門には西洋人の教員、ネイティブ部門には東洋人の教員が所属した。<sup>1)</sup> ヒンドゥスターニー語科においても他の語科と同様に、これら両部門に属する教員のうち、ヒンドゥスターニー語の知識を有する者によって、教育・研究・出版活動が行なわれていた。

FWC のヒンドゥスターニー語教員については、ダースが一覧表を挙げているほか、ヴァルシュネーヤやランキング [Ranking 1920, 1921a, 1921b] らも言及しているが、それらは全て後世に著されたものであり、若干ではあるが、日付の記述に相違がみられる。<sup>2)</sup> 以下、当時の FWC 関係者であることからその記述の信憑性が高いと考えられる、FWC のヒンドゥスターニー語教員ローバック (Thomas Roebuck) が 1819 年に著した記録<sup>3)</sup> を基に、当時の教員の職歴を、氏名アルファベット順で示す。カッコ内の年号は、在任期間である。

(1) アトキンソン (James Atkinson) … 試験官 (Public Examiner) (1815 年 1 月 3 日 -), 事務補佐官 (Assistant Secretary) (1815 年 1 月 3 日 -1816 年 6 月)。

---

1) 筆者が調べた限り、ヨーロッパ部門の教員の全員がイギリス人、ネイティブ部門の全員がインド人であったと考えられるが、イギリス人やインド人以外の教員が在職していた可能性も否定できないため、ここでは断定を避け、「西洋人」、「東洋人」としている。

2) たとえば、後述の一覧の (6) で、マーティンという人物が助教授に就任したとされる時期に関して、ローバックは 1813 年 11 月 19 日としているが、ダースは 1813 年 7 月 19 日と述べている [Dās 1978: 123]。

3) ローバックが FWC 在職時に記した記録で、同カレッジで毎年行事として実施されていた公開討論会 (Public Disputation) の報告書が主に採録されている。公開討論会のプログラムの内容 (開始時刻・場所、討論会参加者や議題、大会中に行なわれた教員や総督のスピーチの概要等) について詳細に述べられており、補遺には在職した教員の職歴が記されている。公開討論会の具体的な討論内容に関する記述や、各教員についての情報は十分とはいえないが、それでも FWC に実際に在籍していた人物によって記されたという点、また刊行された数少ない FWC の記録であるという点から、貴重な史料である。

- (2) ギルクリスト…教授 (Professor) (1800年11月1日-1804年2月23日).
- (3) ハンター (William Hunter) …試験官 (1801年12月-), 事務官 (Secretary) (1805年11月1日-1811年10月31日).
- (4) ライデン (John Leyden) …試験官 (1807年9月-1808年2月頃), 事務補佐官 (1807年9月28日-1808年2月21日頃).
- (5) ロケット (Abraham Lockett) …試験官 (1808年2月-), 事務補佐官 (1808年2月22日-1811年10月31日頃), 事務官 (1811年11月1日-).
- (6) マーティン (Russel Martin) …助教授 (Assistant Professor)<sup>4)</sup> (1813年11月19日-1816年12月23日).
- (7) マクドゥーガル (William Macdougall) …助教授 (1802年11月-), 試験官 (1806年12月31日-1807年9月頃), 事務官 ((3) ハンターの代理) (1807年5月-), 事務補佐官 (1807年7月14日-).
- (8) モーアト (James Mouat) …助教授 (1803年2月-1805年12月31日), 教授 (1806年1月1日-1808年2月21日頃).
- (9) プライス (William Price) …ベンガル語とサンスクリット語の助教授 (1813年10月1日-).<sup>5)</sup>
- (10) ローバック…事務補佐官 (1811年3月9日-1812年6月22日, 1812年7月11日-), 事務官 (1815年1月3日-1816年10月4日, 1817年1月8日-1817年4月21日), 試験官 (1811年3月9日-), 助教授 (1816年12月-).
- (11) テイラー (John William Taylor) …教授 (1808年2月22日-).
- (12) ウォーリング (Edward Scott Waring) …助教授 (1801年6月-1802年1月).

[Roebuck 1819: Appendix 52-57]

上記の一覧表によれば、設立直後から1820年頃までのFWCのヒンドゥスターニー語科では、教授、助教授、試験官、事務官、事務補佐官によって、教育活動が実施されていた。しかし、後述するとおり、こうした体制は、1830年頃に講義が停止されるに伴い、試験官を中心とした教育体制へと変化していくこととなる。

## 2.2 歴代の語科長

ここで、歴代のヒンドゥスターニー語科長の経歴と、FWCにおける彼らの活動の内容について取り上げる。以下、インド国立公文書館所蔵の公文書を引用しているヴァルシュネーヤに

---

4) 本稿では Assistant Professor を便宜上「助教授」と訳出しているが、国と時代によって大学の職階制度は異なるため、日本でいう助教授と同一ではないことに留意する必要がある。

5) 後述のとおり、その後ヒンドゥスターニー語教授兼語科長に任命された。

よる記述の要約を主に示す。他の先行研究の記述内容、脚注、参考文献一覧を読む限り、それらの著者はヴァルシュネーヤの記述を又引きしている可能性が高い。

### 2.2.1 ジョン・ギルクリスト—FWCの礎を築いた初代語科長

彼は、FWCを開校すべく試験的に開校されたオリエンタル学校（Oriental Seminary）の頃から教鞭を取っていた人物である。1799年2月にオリエンタル学校の教壇に立ち始め同学校の成果を望ましい結果へと導いた彼は、FWCが設立された1800年8月18日付で同カレッジに雇用された。その後、同年11月1日には、ヒンドウスターニー語科長兼教授に任命されることとなる。彼は、ヒンドウスターニー語の授業を受け持つことに加え、ムンシー（munshi）<sup>6)</sup>を監督して数多くの著作・翻訳活動を行なった。また、デーヴァナーガリー文字またはペルシア・アラビア文字で書き記されていたヒンドウスターニー語を学生が理解しやすいように、英字アルファベットで表記する方法を独自に模索するといった研究活動も行なった。しかし彼は、健康上の理由から、1804年2月23日付で、FWCを辞職している [倉橋 2018: 29]。わずか5年近くの在職期間ではあったが、彼がFWCにおいて残した業績は、後任の教員と比べても特に多かった。彼の在任中に作られた著作物は、彼の辞職後にも出版されることとなる。<sup>7)</sup>

### 2.2.2 モーアト—教員の待遇改善に尽力

ギルクリストの帰国後、1803年2月にFWCにヒンドウスターニー語の助教授として雇われていた [Roebuck 1819: Appendix 54] モーアトが、ギルクリストの任務を引き継いだ。

モーアトは、1806年1月1日にヒンドウスターニー語教授に就任後、ペルシア・アラビア語教員との待遇格差に異を唱えたとされる。

1807年8月24日付でモーアトがFWCの意思決定機関であるFWC評議員会に宛てた手紙では、ギルクリストの帰国後にその任務を助手であった自分が引き継ぐこととなったが、1806年1月1日に教授に昇進するまで給与が増額されなかったこと、また、同時期に同じような状況にあったペルシア・アラビア語科の助手には給与の増額がなされていたこと、そしてそのことをウェルズリー総督に抗議しても取り合ってもらえなかったことが記され、増額されるべきはずであった給与を今後支払ってほしいとの要求がなされている。しかし、こうした働きかけもむなしく、1807年9月26日に、FWC評議員会は彼の要求に難色を示した。その後、1808年2月3日にモーアトは、FWC評議員会に対して、体調不良を理由としてイギリス本国に帰国したいと申し出ている。同月20日に彼はFWC評議員会長に辞職願を送付し、24日にこの辞職願はベンガル総督に受理された [Vārṣṇeya 1947: 77-78]。

上記の記述内容からは、モーアトが行なったとされる抗議の詳細をうかがい知ることができ

---

6) アラビア語が語源。FWCにおいては、インド現地語ネイティブの教員を指す呼称として使用された。

7) ギルクリストの経歴や活動については、『アジア・アフリカ地域研究』2018年第18-1号で詳しく取り上げられているので参照されたい [倉橋 2018: 20-40]。

る。彼のこうした訴えかけは、自身への待遇の改善を求めることを通して、FWCの運営体制における矛盾や問題点を提起する役割を果たしたのではないかと考えられる。モアートのこの申し出は受理されなかったようであるが、それは恐らく、FWCが当時会社取締役会から縮小命令を受けており、経費削減を迫られていたためではないかと考えられる。

### 2.2.3 テイラー—教育・出版活動を推進

モアートの後任には、テイラーが1808年2月22日に任命された [Roebuck 1819: Appendix 54]。彼もモアートと同様、在任中に体調を崩しており、1809年6月中旬頃に体調が悪化した際には、代理を立てる形で一旦退任している。その後、復職したものの体調が回復しなかったテイラーは、FWC評議員会に対して、ヒンドウスターニー語の代替教員を任命するよう申し出ることとなる。この提案は1810年2月14日にベンガル政府に伝えられ、同日付で許可された。1811年8月30日には、FWC評議員会に、熱病にかかっている旨を手紙で報告している。この手紙はベンガル政府へと届けられ、同年9月6日には同政府から休職の許可を得た。しかし、そうしたなかでもテイラーは、HCを卒業してからFWCに入学してくる学生が初歩的なヒンドウスターニー語の知識さえも習得していないことに気付き、1813年10月30日にFWC評議員会に対して、ヒンドウスターニー語科の教員を増員するよう求めた [Vārṣṇeya 1947: 81-85]。同年11月19日にその要求は承認された [Samī'ullāh 1989: 62]。

テイラーの在任中には、FWCの制度に重要な変革はなされなかったが、ギルクリスト以降の時期の中で特に多くの出版がなされた点は、特筆すべきである。FWCでギルクリストの下でヒンドウスターニー語著作活動に従事したムンシーのひとりであるラッルーラルの『プレムサーガル』(*Premśāgar*)<sup>8)</sup>や『ラージニーティ』(*Rājñīti*)<sup>9)</sup>がヒンドウスターニー語の学習において非常に役立つ著作であると述べ、より有能な著作活動に携わるムンシーの採用を要求する等、ヒンドウスターニー語科の活動の促進を試みた。しかしそうしたなか、1823年5月23日に政府より軍への任命を受け、両立が困難との理由から、FWCを退職した [Vārṣṇeya 1947: 97-112]。

8) クリシュナ神の遊戯が90章にわたって語られている『バーガヴァタ・プラーナ』(*Bhāgavata purāna*)の、第10巻のドーハー韻律やチョウパーイー韻律翻訳を基に、ラッルーラルが1803年にブラジ・パーシャー版からカーリー・ポーリーに翻案したもの。初版は1810年に、第2版は1842年に出版された。作品中には、特に語彙の面で、ラッルーラルの母語であるブラジ・パーシャーの影響が及んではいないもの [Vrajratandāsa 1953: Preface 1-12]、ペルシア語やアラビア語の語彙を使用しないカーリー・ポーリーで創作を行なうことには成功している。このことからこの作品は、当時のヒンディー語を学ぶヨーロッパ人にとっての主要な教科書となったとされる [McGregor 1974: 67]。

9) サンスクリット語作品『パンチャタントラ』(*Pañcatantra*)のベンガル語版である『ヒトバデーシャ』(*Hitopadesa*)を、ラッルーラルが原文の要素を残しつつブラジ・パーシャーに翻案した作品 [McGregor 1974: 67]。1826年9月11日にプライスはFWC評議員会長に、この作品を1部2.5ルピーで100部購入して欲しいと要請し、許可された [Vārṣṇeya 1947: 143]。

#### 2.2.4 プライスーヒンドゥスターニー語科最後のヨーロッパ人語科長

1813年10月にサンスクリット語とベンガル語の助教授としてFWCに雇用されたプライスは、1821年4月に、ペルシア語等の言語科目の試験官にも任命された。1823年11月頃には、ヒンドゥスターニー語教授兼語科長に任命されることとなる。具体的な時期は不明であるが、彼はブラジ・バーシャーも教えていたとされる。

プライスがテイラーの後任として任務を行ない始めた正確な時期については定かでないが、1823年11月20日付のベンガル政府書簡によると、プライスはこの日の時点で既に、FWCのヒンドゥスターニー語科長として業務を行っていたことが確認できる。彼も給与の増額を陳情しているが、1821年11月28日付の取締役会の手紙によると、彼の要求は認められなかった。なお、1824年10月11日付でFWC評議員会事務官に宛てた手紙の中で彼は、自身を「ヒンドゥスターニー語教授」ではなく、「ヒンディー語教授」と名乗っている。1824年以前にも1, 2度「ヒンディー」という単語が使用されていたとみられるが、同単語が現代の意味で用いられるようになったのは、プライスのこの手紙によってであった。彼は、インドの民衆言語であるヒンディー語の教育を行なうことが、インド統治において重要であると考えた。そのため彼は、言語的に共通点の多いヒンドゥスターニー語とペルシア語を同時に学ぶのが効率的とみなされていたためにFWC内で軽視されつつあったベンガル語とともに、ヒンディー語教育の重要性を主張した。1827年10月には、40人のインド人教員に試験を行ない、合格した4人にヒンディー語を教える資格を与えた。その後、ヒンドゥスターニー語科では、ヒンディー語も教えられるようになった。

その後も彼は任務を続け、1829年8月19日付の手紙には、教授として、週2日、学生が持ってくる課題への回答の添削を行ない、学生に対して試験を実施するほか、ベンガル語試験官の代理も務めていたことが記されている。

その後総督ベンティンク (William Bentinck) は、1830年6月1日よりFWCの3つの教授職と学生への講義を廃止すると決定した。これと同時期に、プライスはFWCの教授を退官し、試験官としてFWCに残ることとなったが、その翌年の末にはFWCを退職している [Vārṣṇeya 1947: 113-145]。

上記によると、FWC内では次第にその活動が縮小されていき、教職員が複数の言語の教員や試験官を兼務するように組織体制が変化していったようである。特に1830年頃の時期は、教授職が廃止されて試験官のみによって教育活動が行なわれるようになったという点で、FWCにとって特に大きな転機であったといえる。

### 3. ネイティブ部門の教員

ネイティブ部門の教員は、ヨーロッパ部門の教員の下で、多くの著作・翻訳活動等に従事し

た。ヒンドゥスターニー語科にも、ネイティブ部門の教員を束ねるための、ムンシー長や副ムンシー長と呼ばれる役職が置かれていた。同語科のネイティブ部門の特徴のひとつは、バーカー (bakhā)・ムンシー<sup>10)</sup> (又はパンディト) の存在である。彼らは、ブラジ・バーシャーの教員として、FWCの著作・翻訳活動において特に大きな業績を残した。以下、歴代のバーカー・ムンシーに焦点を当て、主に彼らによる著作物の序文における記述を基に、彼らの経歴や活動についてみていくこととする。

### 3.1 ラッラーラール—長年にわたる多くの業績

ラッラーラール (ラールチャンド、又はラッラージー、或いはラール・カヴィ) は、グジャラート地方のバラモンの家に、4人兄弟の長男として1763年頃に生まれた。彼は、家庭環境の中でサンスクリット語、ペルシア語、ブラジ・バーシャーを習得した。父が死去すると、1786年頃に生計のためにムルシダバードへ向かい、現地の太守に7年間仕えた。1793年頃にはカルクッタへ移り、学校を開いている。そうしたなかで、彼はギルクリスト<sup>11)</sup> と出会った [Vrajratandāsa 1953: Preface 6–8]。

彼はその後、ギルクリストの要望によって、ヒンドゥスターニー語科のバーカー・ムンシーとしてFWCへと招かれることとなる。ラッラーラールがFWCに雇われた時期については主に、1800年とする見解 [McGregor 1974: 66] と、1801年8月から働き始めて1802年2月19日に正式にFWC評議員会から雇用されたとする見解 [Samī‘ullāh 1989: 48] が存在する。

彼が翻訳・翻案を行なった主な作品としては、『プレームサーガル』、『スィンハーサン・バッティースイー』 (*Simhāsan battisī*)<sup>12)</sup>、『バエタール・パッチースイー』 (*Baitāl paccīsī*)<sup>13)</sup>、『シャクンタラー』 (*Shakuntalā*)<sup>14)</sup>、『ラージニーティ』 (*Rājñiti*)、『マードーナル』 (*Mādhonāl*)<sup>15)</sup>、『サバー・ヴィラース』 (*Sabhā vilās*)<sup>16)</sup>、『ラターイフ・ヒンディー』 (*Latāif Hindī*)<sup>17)</sup> 等が挙げられる。

10) インド北部アグラ地方のブラジ・バーシャー方言に精通したムンシーのこと。

11) ヴラジラタンダースは、同文中でギルクリストをFWCの校長 (principal) と説明している [Vrajratandāsa 1953: Preface 8]。

12) サンスクリット語からブラジ・バーシャーに翻案されていたものを、ラッラーラールがカーリー・ボーリーに翻訳した作品 [Vrajratandāsa 1953: Preface 11]。ボージャ王に宮中の32人の女性がヴィクラーマ王の事績を語るという内容。1804年にカージム・アリー・ジャワーン (Kāzim Alī Jawān) とともにラッラーラールが翻訳し、翌年ペルシア文字とデーヴァナーガリー文字の両方で印刷された [Azīm 1986: 133–134]。1805年5月20日に、FWC評議員会は同月13日付のハンターからの手紙を受けて、この著作を1部当たり16ルピーで100部購入することを決定した [Vārṣṇeya 1947: 74]。

13) この作品も原文はサンスクリット語であり、ブラジ・バーシャー版をラッラーラールがカーリー・ボーリーに翻訳した作品である [Vrajratandāsa 1953: Preface 11]。ヴィクラーマ王の元に悪魔が現れ、人としてのダルマや婿選び式の慣習などに関する25の物語を語って王に意見を問う物語。モアトはFWC評議員会に宛てた1805年9月27日付の手紙で、この著作をFWCの教科書にしたいと申し出た。この申し出は翌年に許可され、FWC評議員会が1部当たり12ルピーで100部購入することを決定した [Vārṣṇeya 1947: 74–75]。

14) この作品は、ラッラーラールがサンスクリット語からカーリー・ボーリーに翻訳したものである [Vrajratandāsa 1953: Preface 11]。

ラッラーラールは FWC に 24 年間務めた後、退官した。年金を受け取った後、60 歳頃にその生涯を終えている [Vrajratandāsa 1953: Preface 10].

### 3.2 サダル・ミシュラー-FWC 初期に多くの著作・翻訳を行なったムンシー

彼は、ラッラーラールと同時期に同じバーカー・ムンシーとして FWC に雇われた人物である。1767~68 年頃にクリシュナ神を信奉する熱心なバラモンの家庭に生まれた彼は、24、5 歳の時にカルカッタへ移住した。その後彼は、サンスクリット語の学者として頭角を現し、FWC に雇用された。彼は、短い FWC 在職期間ではあるが、多くの著作・翻訳活動を行なった [Dās 1950: Preface 1-3].

彼は、1803 年に『ナースィケートーパーキヤーン』(*Nāsiketopakhyān*) をサンスクリット語からカーリー・ボーリーに翻訳した。1804 年に FWC へと招かれ、その後約 5 年間在職することとなる。1806 年には『アディヤートマラーマヤナ』(*Adhyātma Rāmāyana*) をカーリー・ボーリーに翻訳したことで、<sup>18)</sup> また、1809 年にはヒンディー語とペルシア語の単語一覧を翻訳したことで、FWC から賞を与えられた。<sup>19)</sup> 1810 年には、トウルスィーダースの『ラムチャリトマーナス』(*Rāmcharitmānas*) の改訂を印刷させた。1847 年から 1848 年頃に、80 歳でその生涯を終えている [Sharma 1960: Preface 8].

### 3.3 ラッラーラール以後のバーカー・ムンシー

ラッラーラールの後任には、ガンガープラサード・シュクルという人物が、バーカー・ムンシーに任命された。彼は当時、セランポール伝道団 (Serampore Mission) で新約聖書をカンノウジ方言に翻訳していたところであった。FWC のベンガル語教授ウィリアム・ケアリー (William Carey) による紹介を受け、プライスが彼にサンスクリット語とヒンディー語の試験を受けさせ、1823 年 9 月 23 日に彼を雇うよう FWC 評議員会に進言した。彼は、『プレームサーガル』改訂版の校正や、プライス編纂の辞書の改訂・増補版の作成等に従事した。しかし、彼は 1826 年 7 月に療養のためインド北部 (Upper Provinces, のちの UP 州) へ向かい、数ヵ月後にムルシダバードで死去している。

---

15) ヴィク라마暦 1587 年 (1530~1531 年頃) にサンスクリット語で著されていたものがヴィク라마暦 1755 年 (1698~1699 年頃) にブラジ・バーシャーに翻案されていたが、それをラッラーラールがカーリー・ボーリーに翻訳した [Vrajratandāsa 1953: Preface 12].

16) ブラジ・バーシャー韻文集、1810 年に教科書用に第 1 版が印刷された [Azīm 1986: 135]。1815 年 1 月 16 日に FWC 評議員会長は、プライスにこの作品の出版を通知した。同月 1 月 26 日にベンガル政府は、出版許可を下した。同年 2 月 10 日には請求書がベンガル政府へ送られ、同月 14 日に承認された [Vārṣṇeya 1947: 106-107].

17) ウルドゥー語、ヒンディー語、ブラジ・バーシャーで書かれた 100 の物語集 [Vrajratandāsa 1953: 13]。1810 年にペルシア文字とデーヴァナーガリー文字の両方で印刷された物語集 [Azīm 1986: 135].

18) 1806 年 5 月 17 日の FWC 評議員会の会合で、この作品をサンスクリット語からカーリー・ボーリーに翻訳するために、サダル・ミシュラに 300 ルピー支給することが決定された [Vārṣṇeya 1947: 75].

19) 1809 年 5 月 27 日の FWC 評議員会会合で、50 ルピーの支給が決定された [Vārṣṇeya 1947: 99].

1827年1月15日には、FWC評議員会はキャリーラームという人物を、後任に任命している。しかし、彼の在職も短期間に終わった。1829年にキャリーラームが辞職すると、同年9月からポストに空きが出た。

1832年1月1日には、ブラフマ・サッチダーナンドという人物が後任に任命された。彼は、サンスクリット語とヒンディー語の両方に長け、他のムンシーへのこれらの言語の教育や、著作物の校正等を行なった。しかし彼は金貸業に没頭し、FWCにほとんど来なかった。このため、1838年9月5日付ベンガル政府文書によると、彼はFWCを解雇されている [Vārṣṇeya 1947: 97-146]。

#### 4. 結びに代えて

FWCのヒンドゥスターニー語科のヨーロッパ人教員について、ギルクリストに関する先行研究はいくつか存在するが、彼以外の教員については、これまでほとんど取り上げられてこなかった。しかし、ギルクリスト以降のヒンドゥスターニー語科のヨーロッパ人教員は、ギルクリストほどに目立った形ではないものの、FWCの教育・出版等の活動、また教員の地位向上のための働きかけをさまざまに行なっていた。ヨーロッパ人教員の下で教育・翻訳活動を行なったネイティブ部門の学者についての先行研究もかなり少ないが、彼らは、FWCから能力を認められ招聘される形で雇用されていたようである。ヨーロッパ人教員の指導の下でネイティブ部門の学者がこうした活動を行なうスタイルは、FWCのひとつの特色であったといえる。なかでも、ラッルーラールがFWCの出版活動に果たした役割は、大きなものであった。

FWCのヒンドゥスターニー語科においては、1830年頃に語科長のポストが廃止されるという変更がなされたものの、カリキュラム、組織の運営に関する事項、教科書を主とした著作・翻訳活動等に関して、語科を統率する長や、彼らの下で任務を行なうムンシーらが在職していた。彼らの存在が、FWCが設立後間もない時期から会社取締役会から縮小・廃止の圧力を受け続けたにもかかわらず、約半世紀もの長きにわたって存続することを可能にしたのではないかと考えられる。

以上、インドにおける官吏教育の端緒を開いたFWCの活動が、教員に支えられる形で維持され、後世へと受け継がれていった過程について取り上げた。本稿が、大英帝国インドの歴史を紐解く一助となれば幸いである。

#### 謝 辞

本稿は、著者が博士論文に盛り込んでいなかった研究内容を、発展させる形で執筆したものである。本稿の掲載へ向けご協力賜った査読者及び全ての方々に、深く感謝の意を表したい。

引用文献

日本語

- 倉橋 愛. 2017. 「大英帝国の『外国語大学』—Fort William College の創設から廃校まで」大阪大学大学院言語文化研究科博士論文（未公開）.
- . 2018. 「ギルクリストのヒンドウスターニー語研究への貢献—オリエンタル学校設立の経緯と出版活動」『アジア・アフリカ地域研究』18(1): 20–40.

英語

一次史料（公刊）

- Roebuck, Thomas. 1819. *The Annals of the College of Fort William, from the Period of Its Foundation, by His Excellency the Most Noble Richard Marquis Wellesley, K. P. on the 4th May. 1800 to the Present Time*. Calcutta: Hindoostanee Press.

二次史料

- Dās, Sham Sundar. 1950. *Chandrāvati athvā nāsiketopākhyān*. Kāshī: Nāgarīprachārīnī Sabhā.
- Dās, Sisir Kumar. 1978. *Sāhibs and Munshīs: An Account of the College of Fort William*. Calcutta: Orion Publications.
- Jones, Richard Steadman. 2007. *Colonialism and Grammatical Representation: John Gilchrist and the Analysis of the ‘Hindustani’ Language in the Late Eighteenth and Early Nineteenth Centuries*. Oxford: Blackwell Publishing.
- Kidwai, Sadiq-ur-rahman. 1972. *Gilchrist and the ‘Language of Hindoostan.’* New Delhi: Rachna Prakashan.
- McGregor, Ronald Stuart. 1974. *Hindi Literature of the Nineteenth and Early Twentieth Centuries*. Wiesbaden: O. Harrassowitz.
- Azīm, Sayyid Vaqār. 1986. *Fort Viliyam Kālij: Tahrik aur Tārikh*. Lahor: Universal Books.
- Ranking, G. S. A. 1920. *Bengal Past and Present Vol. XXI*. Calcutta: Journal of the Calcutta Historical Society.
- . 1921a. *Bengal Past and Present Vol. XXII*. Calcutta: Journal of the Calcutta Historical Society.
- . 1921b. *Bengal Past and Present Vol. XXIII*. Calcutta: Journal of the Calcutta Historical Society.
- Samī’ullāh. 1989. *Fort William College: Ek Mutāla’ah*. Delhi: Educational Publishing House.
- Sharma, Navinilochan. 1960. *Sadal Mishra-granthavali*. Patna: Bihar-Rashtrabhasha-Parishad.
- Vārṣṇeya, Lakshmiśāgar. 1947. *Fort William College: 1800–1854*. Allahabad: Allahabad University.
- Vrajratandāsa. 1953. *Prem Sagar*. Kashi: Nāgarīprachārīnī Sabha.